

TERAYAMA
SHUJI
STUDIES

寺山修司研究

寺山修司研究

5

国際寺山修司学会

9784830112188

ISBN978-4-8301-1218-8
C0074 ¥2300E

1920074023004

文化書房博文社
定価(本体2,300円+税)



『寺山修司研究 第四号』国際寺山修司学会（文化書房博文社、二〇一）

（なかやま そうたるう 杏林堂クリニク・医師）

幸せに、恐れる山

イヴァン・ディアス・サンチヨ

昭和時代に非常に流行した詩がある。

山のあなたの空遠く

さいわい棲むと人の言う

作者の名はカール・ブッセ。少なくともヨーロッパではほとんど知られていない三流詩人である。それにもかかわらず、日本では今でもこの歌のことを知っている人の数は少なくない。さらには、この歌はしばしば日本の作家たちによって取り上げられてきたのである。例えば一九六五年に、澁澤龍彦は『快樂主義の哲学』中で、このようにコメントしている。

この詩の意味は、だいたい、つぎのようなことではないかと思えます。——幸福というものは、人のうわきによれば、山の向こうの空の遠くのほうにあるらしく、だれもこれを見ることがない。わたしたちがいくらその幸福にあこがれて、ふらふら旅に出て行ったとしても、結局は、これを手に入れることができず、幻滅して、悲しい気分になって、すぐすぐ故郷に帰ってこなければならなくなるのがおちだ。だから、身分不相応なことを考えては行けない。現在の境遇に満足して、手のとどかない幸福などに、むやみ

にあこがれてはいけない。所詮、幸福などというものは、ただ遠くからぼんやりながめていればよいのである。——まあ、こんな意味だろうとおもいます。

つまり澁澤はこの詩を「諦念」という意味で理解しているのである。彼は世間一般の「幸福」という考えを批判し、その代わりに「快樂」という概念を提示していた。それでは同時代に活躍した作家である寺山修司は、どのようにこの詩を理解していたのだろうか？ 一九六九年に寺山は、『幸福論』の第一章「マッチ箱の中のロビンソン・クルーソー」で次のように述べる。

「前略」(この)詩は、今では三遊亭歌奴という落語家の話の枕になってしまっていて「山のあな、あな、あな……」と繰り返されながら笑いものにされる。だが、この笑いはカール・ブッセの感情的な幸福観、「この世の他の場所」への魂の上命願望を批評して生まれてきたものではなくて、もつと自虐的な幸福観の否定として生まれてきているのである。どうせ、他の場所へ行つたつて幸福なんてものがあやしないう、生活に疲れた小市民達が、自分自身の少年少女期にいだいていた理想を嘲う、というのは何と悲惨なことだろう。そのくせ彼らは、遺産を相続するとか富くじでもうけるとか名誉とかを、「幸福」ということばかりきり離して追い求めることには今でも、かなり熱心なのである。一体、「山のあな」に落ち込んでいるのは誰なのだろうか。

「どもり」という問題に対して敏感であった寺山は、どもることを嘲る風潮を批判的に捉えていたのかも知れない。しかし同時に、彼は澁澤の場合と同様に、小市民的な「満足」や「諦念」を批判しようとしていたに違いない。そのような小市民的な考え方には、確かに矛盾が存在している。一方では、彼らは故郷に安住することを受け入れ、山を越えずに住むと宣言しているというのに、他方では権力者から圧力を受けたり、突然の被害に見舞われたりすれば、無理やりにでもその悲劇的な山越えを決心するのである。マッチ箱に閉

じ込められているロビンソン・クルーソーのように、「山のあな」に引きこもるのか、それとも「山の罿」に陥るのか——、どちらにしても孤独な選択だといつても過言ではないだろう。しかもその「あな」は不思議の国のアリスが落ちた穴とは違って、どこにも通じることのない穴なのである。

ここで一旦、アラン(一八六八—一九五二)の言葉を思い出してみよう。「誰でも求めるものは得られる。そして、欲しいものはすべて山と同じようなもので、私たちを待つており、逃げていきはしない。だがそれゆえ、よじ登らなければならぬ」。それでは何故ここでも、欲しいものは山に喻えられているのだろうか？ そもそも欲望のような越えがたい山を、無理にでも越える義務など存在しないのではないだろうか？ このような前提には、どこか間違いがあるように思える。つまりアランは、幸福というものを山のような途方も無い高さをもった、非日常的なものと捉えているのだが、ここには問題があるように思われる。幸福論が問題としなければならないのは、ナポレオンの夢などではなく、もつと身近なものでなければならぬのではないだろうか。確かに努力して得たものに対して、人々は幸せを感じる。しかしそれが自分で選んだのではない「山」であるならば、自虐的になってまで登る必要など存在しないだろう。

近年の日本でも、アランの『幸福論』は広く知られているようである。すでに昭和時代に寺山が指摘するように、彼の本は簡単に書店で手に入れることのできるものだった。寺山は言う。「書店の片隅では、今でもアランやヒルティの、役にも立たない幸福論が埃をかむっているばかりだ」。この埃は、アランに対する寺山の嫌悪感が生み出したものなのだろうか。仮に誰も買わないために埃がつもったのだとしたら、なぜ今日の日本でもアランの本が読まれているのか説明がつかない。ともかく今日の実情を、NHKのテレビ番組がある程度物語ってくれるように思う。二〇一一年一月から放送された『100分の名書』では、一〇〇分の間に、アランの思想が一般の人たち向けに説明されている。この番組の初回ではニーチェを扱っていたのだが、いったいこの思想的に異なる二人の取り合わせが意味するものは何なのだろうか？ アランの哲学は情念を控えることを信念とするものだったのに対し、ニーチェは情念を抑制しないことを熱心に説いた哲学者だった。つまりここでは、メディアを媒介とした、新たな折衷主義の時代が始まり、ひとつの玩

具箱の中にあらゆる哲学が放り込まれるのである。この玩具箱の中では、哲学者の思想は表面的にしか捉えられないが、本を売りさばく側にとってはそんなことはどうでもいいのだ(またアランの新訳が出た!)。今日このような『幸福論』がテレビにまで現れる理由には、東北の災害が関係していることは明らかである。NHKで紹介された書籍を俯瞰してみれば、放送局の志向をはっきりと窺い知ることができる。

つまり一方では、気力を高めるための書物——ニーチェ、孔子、ブッダ、アラン。他方では、復興に向かつて人々を駆り立てる実践的な書物——「マネジメント」「学問のすすめ」、そしてマキャベリの「君主論」。それにしてもアランとニーチェを同列に扱うことなどできるのだろうか? 答えは決まっている。後者の考え方だけが、澁澤や寺山の理論に通じている。たとえば「快樂主義の哲学」で澁澤は、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」に反駁するが、そこでは情念に関するニーチェの思想が浮かび上がる。

ずいぶん、みじめつたらしい詩です。賢治の童話は好きですが、この妙な人生哲学めいた自虐的な詩は、どうもいただきかねる。目の前に牛肉があるのに、「味噌ト小シノ野菜」で満足していなければならぬという法はありません。なにもわざわざ「ミンナニデクノボウト呼バレ」なければならぬ必要はありません。正当な理由があるときには、怒りを爆発させてもいいし、「丈夫ナカラダ」をもっていれば、いろんな欲望も湧いてくることでしょう。どうして、それを満足させてはいけないのか。

「正当な理由があるときには、怒りを爆発させてもいい」という言葉にニーチェなら同意するだろう。太宰治が『人間失格』で書いたように「怒る時に怒らなければ人間の甲斐」などないのである。

宮沢と同様に、アランも雨の喩えを使って、話を続ける。「さあさあ、雨降りのときこそ、晴々した顔が見たいのだ。だからわるい天気にはいい顔をするものだ。」² それに対して、寺山修司は「アランの『幸福論』などくそくらえ!」と怒鳴りつける。

幸福であることが他人に対しても義務であることはもちろんだが、自らの毒気を消化し、言いたらない怒りをさえ浄化してしまうような「幸福論」は、ほんの気紛れにしかならないだろう。(…) 幸福は、むしろアランの受け入れた「わるい天気」そのものを根元的になくするための日常的な冒険の中にこそ、存する。

ところで今まで述べてきた寺山や澁澤のような批評は、ディススクールのレベルでは、別の側面を読み取ることもできる。それは教訓のような表現に抵抗しようとする傾向である。「幸福論」を語る時、アランのように「山」や「雨」といった自然を喩えとして使うと、道徳というレベルでしか議論を展開できないという欠点がある。なぜなら「山」や「雨」のような個人の意思とは無関係な存在に喩えることによって、「幸福」とは何か外からやってくるもの、運命的なものにみえるからである。それに対して寺山は「日常性」、澁澤は「快樂」を再評価することを要求している。そこで寺山がしばしば用いる「スポーツ」や「賭博」、「犯罪」、「見世物」といった比喩が、彼の考える幸福の意味を支えている。もちろんそれらも喩えとして考えることはできるのだが、道徳的なモデルとは合致しないので、幸福を日常の外に置くような教訓にはならないだろう。たとえば寺山の場合、その日常性への第一歩は、マツチ箱から逃避すること、故郷から家出すること、昭和時代の家庭的な針時計(雨だから、家にこもる)十時になったから、寝る時間)を埋めることなどである。ここでも我々は、寺山が『盲人書簡』のような作品で用いたマツチの意味に出会うことになる。いかにしてそのちっぽけな物体が、観客と俳優との境界線を越える役割を果たしたのか。ここでそのことを詳しく論じる余裕はないが、日常的な道具であるからこそ、マツチはその力を持っているのである。つまり偶然に出会った相手に話しかけられ、彼のタバコに火をつけることによって、具体的、日常的な「幸福論」が始まる。そのため、「我慢」「諦め」「控え目」といった言葉を使う必要などなくなるのである。寺山の幸福論はそもそも、アランとは前提がまったく異なっているのだから。それゆえ寺山は人間を将棋の駒として扱うような運命論とは違って、生氣的・能動的な幸福論を模索してきたのであった。つまり超越的、先見論的なも

のに反論して、内在的、実験論的なものを求めるのである。

それでは、自然災害の場合にはどうしたらよいだろう。運命論的な考えを生み出し、ただ災いを耐え忍ぶだけにとどまるのが当然ではないだろうか。自然の脅威に面し、その被害が予想外な大きさをたたき、誰もが「諦める」しかないと考えてしまうだろう。確かに、東日本大震災が起こった時、日本人の「我慢強さ」や冷静さ、そして人々が並ぶ「順序」などは、ニュースを通して、全世界を驚かせることになった。先進国の中でもきわめて発展した国という日本のイメージは、東京のようなメトロポリスに集約されているだろうが、あれほどの震災後、僅か三日間で高速道路を修復したことに對して、世界から賞賛の声が起こった。ところが技術は明らかに進歩し続けているというのに、人間的な面では、被害者たちはぼろくさい避難所の中で七ヶ月もの生活を余儀なくされたのである。このことは欧米では報道されてはいない。そしてこのようなことが、日本では当然のものとして受け入れられていることは残念なことである。ここでも「諦め」という嫌な言葉がまた現れてくるように思える。そして、その概念に伴って、日本人が大好きな「頑張る」も悲劇の舞台上に登場する。また、そこにも欧米人の偽善が（無知とも言える）現れてくる。欧米のメディアが崇拜していた「順序」「冷静さ」など、所詮に「諦め」の精神に基づいているに過ぎないのである。「諦め」という言葉はスペイン語では「resignación」、英語では「resignation」と訳すことができるだろう。だが、日本とは異なり、欧米ではこの言葉は、性格の欠点のひとつとして扱われている。「諦め」は、奴隸的な考え方に基づき、権力や不幸に屈服する卑屈な態度とされている。その反対語は、「indignación」「indignation」いわゆる「憤り」とみなされる。ここで戯れに、これらの言葉を、ラテン語の「ignis」（火の如く）に引きつけて説明してみよう。つまり、諦めること（resignatio）は火を逆らう、憤慨を控える（re）。同く、憤ること（indignatio）は火をつける、憤慨の状態に入る（in）という意味なのである。

欧米では経済危機による国民の不安がきっかけで、二〇一一年の五月から様々なデモやストライキが続いているが、これは民衆の「憤り」に基づいているものに他ならない。もっとも、この動機の一部は、ナチの

収容所の生き残りであるステファヌ・エセルの『憤れ！』（二〇一一年三月出版）という政治宣伝のパンフレットに基づくことにも注意する必要があるだろう。

ここでも、前述した欧米の「偽善」が現れてくる。自国民の行動は「憤り」に由来するものであるにもかかわらず（欧米の歴史をさかのぼれば、この事実はすぐに明らかとなる）、日本に對しては、「諦め」という性質を褒め称え続けるのである。もちろんこれは、欧米の理想の中では、日本の異国情緒的なイメージがまだ解消されていないからである。欧米ならばどこでも、特にヨーロッパならば、七ヶ月も劣悪な避難所に閉じ込められたならば、すぐに人々は「憤り」を感じ、政府に對してデモを行ったり疑問を投げかけたりするだろう。しかし日本では、「まあ、行く場所がないから、しょうがないじゃないか」（どうせ、山の向こうにも幸せなんて存在しないから）、あるいは「日本は狭いだからね」等等、我慢強い考え方が広まっていただけであった。

もちろん、そうは言っても「憤り」から幸福が生まれるのだと言いたいわけではない。けれども「憤り」であれ、「諦め」であれ、それが個人的な選択でないならば、幸福や快樂への道が開けることはないだろう。昭和時代の書店だろうが、今日の書店、あるいはネット上の書店であっても、人間の根本的な部分が変わらないかぎり、このような状況が変わることはない。それでも私には、今こそ寺山修司や澁澤龍彦のような作者が求められるべきだと思われるのである。

本屋の店頭をながめると、あいかかわらず、『幸福論』とか『人間論』とかいう題の書物が売られています。そして、そういう本の筆者は、たいてい、大学を停年退職したおじいさんの哲学者のような人ばかりです。しかし、わたしはいつも疑問に思うのですが、新時代のエネルギーにみちあふれた若者が、そんなカビくさい「幸福論」なんぞに満足していられるのだろうか。そんな本を読んで、ますますお行儀のよい、ますます飼いや馴れされた社会人になっていくのは、じつに嘆かわしいことではないだろうか。

まったくもって澁澤の言うとおり「嘆かわしいこと」に違いない。今日の時代は、彼の頃よりも多くの本に溢れている。けれどもゆつくりと本を読む時間はかつてよりも限られている。それに市場の要求に振り回されるため、じっくりと作品を制作する時間も取れず、一冊の書物の奥行きにも限度が出てくる。それを踏まえつつも、楽観的な方法をもとめ、寺山の言葉をもう一度読み直し、前へと進んでいくことにしよう。

私たちの時代に失われてしまっているのは「幸福」ではなくて、「幸福論」である。

遠くの山を恐る恐る望む幸せは嘆かわしい。それよりも、恐山を想像力で登ればよいのだ。寺山のように。

註

(1) 情念を控えることによって、感情が内攻的に屈折している状態になる。それは、ニーチェが用いた「ルサンチマン」という言葉を生み出すが、ある意味で、それなしには、笠原伸夫が指摘するように、日本文学の独特なところなどあり得ないだろう。長い引用になるのだが、それなりに甲斐がある。「わたしはきわめて単純に、わたしの内部にある粘液質の感情、世間への、人間へのあるいは隣人へのとりとめない恨み、といったものを、ひとつの文学的な糸によってたぐり出したいと考えていた。この世に人間が人間としてあらわれるのは、ゆきつくところ他者との出あいによってであろう。人のところに昏く残存するのは、他者に対する、他人の世界に対する恨みどころであるかも知れぬ。われわれの内面にかすかにつけられた傷口。それが文学的イメージとしてもあれ形をなしてくるのは、われわれの内面なる感情のねばねばしたちからによる。つまりかかる内なる感情とみあうような外なる形象として、わたしは説経浄瑠璃から井上光晴に及ぶ、卑賤なるものの情念の行方のうえに、なにものかをみいだそうと考えたのだ。そうした考えをみちびきだしたのは、わたしの感情の内なる秩序によるところが多かったはずである。わたしの感受性や体験の原形質として伏在するものは、もし端的にいうことが許されるならば、年下層民の生活感情であり、そのルサンチマンであった」(笠原伸夫『美と悪の伝統』、桜楓社、昭和四四年)

(2) 「悪い天気にはいい顔」とは、これもヨーロッパの諺である。スペイン語で *Al mal tiempo mala cara* と言ふ。その起源は、一九世紀のポランドで、ある乞食の発言だったという伝説が伝えられている。その人物は、もしかすると、説経浄瑠璃のような主人公かもしれない。「阿弥陀胸割」や「しんどく丸」の主人公達は、乞食として世俗の風塵のなかを流浪するが、かれらの被凌辱性とは、本質的には果てしない失墜感にほかなるまい。どこまでも失墜し下降してゆくことによって、自虐感覚みたいなものを截りひらいてゆくのである(笠原伸夫『美と悪の伝統』)

(3) 本当のことを言つて、「Indignatio」(不本意、嫌厭)は「In-dignus」(ふさわしくないなど、低劣な)で、「dignus」(価値ある、ふさわしく、威厳)の否定である。一方、「resignatio」(取り消し、諦め)は「re-signo」(明らかにする、無にする、諦める)で、その「re」は「signo」(記号で示す)の反対や逆の事を意味する。だが、語源そのものは言語とともに生きていくので、語源の意味も言語の精神的な使い方によって変わってくるのではないか。それも、寺山修司の反歴史論に適切であろう。

(二) ティアス・サンチヨ、イヴァン 京都大学大学院文学研究科美学美術史学専修博士課程

寺山修司研究【第五号】

『寺山修司研究』第五号 編集委員会

編集委員長 馬場駿吉

編集委員

清水義和、堀江秀史、久保陽子
イヴァン・ディアス・サンチョ

2012年3月1日 ●初版発行

編者 ●国際寺山修司学会【編】

©The International Society of Shuji Terayama
2012, Printed in Japan

表紙デザイン・天野 天街

発行者 ●鈴木貞義

発行所 ●株式会社 文化書房博文社

T112-0015

東京都文京区目黒台1-9-9

電話03(3947)2034

振替0018-6-86955

URL: <http://user.net.web.ne.jp/bunka/>

印刷／昭和情報プロセス株式会社

製本／風林社塚越製本

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

ISBN978-4-8301-1218-8 C0074